平成 23 年 4 月 30 日

かわら版あんず

第４４号
発行責任者　福地 季子
〒317-0056　日立市白銀町 2-17-1
TEL. 0294-21-4150

多彩な出し物やゲームで 楽しかった“年忘れ会”

１００名以上の参加者を迎え、インドのアルル・サバリトウさんの開会宣言をかわきりに、本会会長挨拶、来賓挨拶（国際交流協議会会長佐藤 眞一様）、日本語教室の優秀者表彰に続き、会食と色々な出演者が歌や、踊りゲームを展開しました。

最初は、招待演芸の“がまの油売り口上”です。刀で紙を切ると見事に紙が切れ、その刀で腕を切ると血が出て、見ているものが、「アー」という心配そうな声があがりました。ガマの油を塗ると血が止まり、傷跡ものこりません。「ウォー」という歓声があがりました。そして、先に腕にガマの油をぬり、刀で切っても、切れずに血も出てきませんでした。また、「ウォー」という歓声があがりました。これを流暢な口上で披露してくれました。

次に、日本伝統の仕舞と謡の披露がありました。
仕舞は、まだかわいい子供でしたがみごとなものでした。

そして、日本語金曜教室のインドネシアの人達がインドネシアの民謡を歌ってくれました。“かわいいあの娘”という題名で日本でも良く知られている曲は、日本語と、インドネシア語でみんなで元気に歌いました。

私のギター演奏を三曲演奏しましたが、練習不足がでてしまいました。

次に、火曜教室の高坂先生のクラスの生徒が懐かしい日本の歌を披露してくれました。難しい日本語の歌詞をよく覚え歌ってくれたのは、皆、感心して楽しく聞き入っていました。

そして、日本語教室に実習に来ていた茨城キリスト教大学の女学生が、サンタクロースの格好でリズミカルで楽しいダンスを見せてくれました。大変、上手な踊りに盛んな歓声が上がっていました。

ゲームは、日本の都道府県を表す力作の大きなカルタで、みんなでカルタ取りをしました。

そして、全員で“幸せなら手をたたこう”を歌いました。恒例の楽しみなプレゼントを交換して、閉会の辞で会を閉じました。全員集合の写真を撮り、全員で素早く片づけを行い、楽しい一日が終わりました。

（半田 善久）

東日本大震災（３月１１日）

今回の地震は、想定の範囲を超えた大地震であり、これについて外国の方が、どのように対処したか日本語教室に戻ってきた外国の方に聞いてみました。

１．**インドネシアの方：**地震発生時、会社にいて棚が倒れた。そして特に避難所等への避難はせず自分の家で過ごした。いちばん困ったと感じたのは電気が使えなかったこと。怖かったのは地震。

２．**イギリスの方：**地震発生時は、学校のグランドいた。ガラスが壊れた。部屋の中は大丈夫だった。地震当日は、避難場所の学校の体育館に避難し、３月１２日～１４日までは日立の友達の家に、３月１５日に東京の友達の家へ、３月１６日～１８日は千葉の親戚へ、３月１９日～２２日は大阪の友達のところへ、３月２３日に日本に戻って来た。怖いのは原子力発電所の事故と津波。

３．**ブラジルの方：**地震発生時、水戸の子供の学校にいたが、校庭の塀が壊れたので被害は大きいと感じた。部屋の中のものは壊れなかった。特に避難はせず家にいた。いちばん困ったのは飲料水、怖いのは、原子力発電所の事故とのことです。

４．**中国の方：**地震発生時、自分の家の２階にいた。壁が落ち、棚の上などのものが落ちた。特に避難所等へは、いかなかった。いちばん困ったのは、飲料水こわかった原子力発電所の事故。その後の余震が多いのも心配です。

５．**中国の方：**地震発生時は、教育プラザの２階にた。特に建物や物が壊れたようには見えなかったようです。小学校の避難所、そして神戸の友達の家へ避難した。国の人が心配したので、３月２７日に中国へ帰り、４月２４日に日本に戻って来た。いちばん困ったと感じたのは、電気が使えなかったこと。こわかったのは、原子力発電所の事故だ。今回の地震で感じた事は次の通り。

「今回の地震は、自然の災害、地震が発生したとき、私は、とてもこわかった。でも、あとで、たくさんてつだってもらいました。きもちがよくなりました。電気と水が使えませんでしたが、友達といっしょでこわくなかったです。日本人は、強い人ですから心配です。」

６．**中国の方：**地震発生時、学校の４階にいたが建物は大丈夫だった。部屋の棚の上にあったものが落ちた。地震後、小学校に避難し、その後東京の友達の家へ、そして国の人が心配したので３月１９日に中国へ帰り、４月１９日に日本に戻った。いちばん困ったと感じたのは電気が使えなかったこと。「*今回の地震では、地震よりも原子力発電所の事故が怖かった。原子力の利用は心配です。*」と言っていました。

７．**中国の方：**地震発生時は、学校の４階にいた。建物は大丈夫だったが、パソコンや書類が落ちた。小学校へ避難し、その後国の人が心配したので３月１６日に中国に帰り、４月１９日に日本に戻った。いちばん困ったのは生活用水、怖いのは原子力発電所の事故。今回の地震で次のように言っています。「*余震と、津波が心配です。コンビニ等で人がきれいに並んでいたこと日本語の先生が心配してくれたことは、よかったです。*」

８．**中国の方：**地震発生時、学校の４階にいた。建物はそれほど壊れなかったが、棚の上にあるものが落ちた。小学校へ避難し、その後、ひたちなか、東京の友達の家へ行き、国の人が心配したので３月１９日に中国に帰り、４月１９日に日本に戻ったとのこと。日立が海に近いと話していたので国の人は津波を大変心配したようです。いちばん困ったのは生活に必要なもの全部。怖かったのは地震、原子力発電所の事故、津波と全部。今回の地震で次のように言っています。

・*よかったこと*

① 日本人の冷静な態度　　③ 地震の後、物価が高くならなかったこと、逆に安かったこと。

② 建物が丈夫なこと。　　④ 日本語の先生が心配して連絡してくれたこと。

・*よくなかったこと*

① 原子力事故、そして健康が心配。　　② 生活が不便だったこと。

③ これからもまだ、生活が心配だ。

９．**インドネシアの人：**地震発生時、東京にいた。電車が止まり日立に戻れなかったのでそのまま他大使館に行った。大使館の人に言われインドネシアに３月１６日に帰国し、４月３０日に日本に戻った。原子力発電所の事故がこわかった。

10．**中国の人：**地震発生時、教育プラザの２階にいた。壊れたものは、なかった。両親が心配してたので３月１８日に中国へ一時帰国し日本へ戻った。いちばん困ったのは携帯電話が使えなったこと。今回の地震で次のように言っています。

「地震発生時、ひとりで家にいました。主人は仕事で帰ってこなくパニックになっていました。また、寂しかったです。携帯電話もつながらず、主人に連絡もできませんでした。助けてもらうこともできませんでした。夜３時ごろ主人が帰ってきました。」

三日目、市役所で６時間待って、水を少しもらいました。それから、マルト前で２時間待って、水２本、パンを２つ買いました。大変でした。」

11．**中国の人：**地震発生時、教育プラザの２階にいた。建物は大丈夫だが、倒れたものがある。１日、池の川運動公園に避難。国の人が心配したので 3 月 15 日にタクシーで東京へ行き、3 月 16 日に帰国した。4 月 16 日に日本に戻った。いちばん困ったのは、電気が使えなかったこと。こわかったのは、原子力発電所の事故、津波。

ラオス国、カンボジアスタディツァーに参加して

〈ドンカムサーン教員養成学校付属幼稚園〉：ラオスビエンチャン「茨城アジア教育基金を支える会」がラオスのモデル幼稚園として支援している幼稚園である。茨城に研修に来ていたラッサミー先生がパソコンで子どもたちの様子を見せてくれた。芋掘り、お寺へのお参り、野外遊び、工作の様子など子どもたちの笑顔が画面にあふれていた。父兄にも好評で入園者数が倍増したこと　また指導内容の優先順位を先生たちが協議し、全体で計画的に取り組めるようになったとのことだった。最後にバーシ―スークワンで私達に神のご加護を祈ってくれた。

（福地記）

〈三つの小学校〉：ラオス南部

ラオス南部の→少ラワン県ラオガーム郡のワンプワイセンタースクールとキェンタンレーの小学校、ワピー群パンメー小学校を訪問した。

ワンプワイセンタースクール、ここは就学前教室から高校までが併設されている。少数民族が 70%、30%がラオ族、少数民族同士が民族語で話をしていると先生の方が言葉がわからないので大変だという。教室も先生も教科書等も十分ではない。貧しい環境で就学前と小学生には、給食がある。高校生の５割位は先生を目指して大学進学を希望しているという。

キエンタレー学校へ。でこぼこ道を２時間以上も車に揺れてやっと、たどりついた小さな村。住んでいるのはゲォ族という民族で 50 世帯、306 人。水戸ロータリークラブが贈った小学校で３教室の真新しい建家が回りの景色にちょっと不似合いな感じだがここの住民にとつてはすばらしいものだろう。

子どもたちは３教室に分かれて入ってはいたが先生は２人しかいない。ご夫婦だそうだ。教科書あったがその他は見当らない。学校とは名ばかりに見える。裸足の子も多く着ている物も口では表せないようなものだがこの子たちは私が思うほど自分たちの境遇を不幸だとは感じていないだろう。ただ教育についてはあの地区ではきちんとした教育はまだまだろうと思う。時間がかかるだろうと思う。校庭は格好の遊び場か小さな子が汲みあげポンプの洗い場で気持ちよさそうに遊んでいた。

そしてパンメー小学校へ。この学校は今年度 SVA の支援を受けて校舎を立て替える事になつている。ラオスと日本の国旗を持った子どもたちと先生をはじめ村長さん、教育長さん父兄と村をあげての大歓迎、手づくりの食事をご馳走になりこどもたちの歌やおどり、そしてバーシーなど一杯の歓迎行事に時間のたつのも忘れるほど。校舎を一回りみせて貰う。この村は 800 人程の人口だそうだが近くには田んぼもあり、機織もしているので比較的裕福な村だと感じた。ここなら教育もしつかりできるのではないだろうか。機織の場所で織物を求め帰路につく。

（諸沢記）

〈カンボジア〉：アンコールワット周辺

アンコールワット、アンコール・トム、タブローム寺院に行った。観光地なのでお土産品を売っていた。「写真集５ドル」「腕輪３つで１ドル」子どもたちが売っていた。許可がいるそうだが子どものほうが売れるからである。トンレサップ湖クルーズでは　男の子が靄網を引いていた。湖上で　小舟が近づいてきたと思ったら女の子が蛇を首に巻いてみせた。あっという間に９歳位の男の子が飛び乗ってきて「コーラ１本１ドル」。そして飛び降りて行った。船の助手をしていた１１歳の男の子は肩たたきも。（１ドル？）「今日学校は？」と聞くと「休んだ」「大きくなったら？」「船長になりたい」。夢は叶えられるのでしょうか。」

水上の学校もあるがまだ義務教育まで行ってない。

２つの国を見たことで　よくよく考えさせられました。

（福地記）

日本語教室の今

日本語教室リーダー就任のご挨拶

反町　正美

今年度より高坂さんの後任としてあんず日本語教室のリーダーを務めることになりました。会の一員に加えて頂いてからまだ日も浅く、色々な面で未熟ではありますが、会員の皆様方のご協力を得ながら何とか任務を全うしたいと考えております。

ご承知の通り、昨年度末の３月に東日本大震災に遭遇し、学習者の多くの方々は母国に帰国され、今年度は学習者数名でスタートせざるを得ない厳しい船出となりました。１日も早く正常な授業に戻れることを祈っています。

リーダーを務めるにあたり、基本的には前リーダーの高坂さんが築き上げてこられた運営方法・方針等を踏襲させて頂き、下記の内容について会員の皆様と話し合いながら進めて行きたいと考えております。

１．会員に望むこと

会員の方々は、それぞれ仕事を持っている方、他のボランティアと掛け持ちの方、更には地域の仕事などを抱えている方など様々で、いつも大変だと思っています。このボランティア活動に参加した理由は各人異なっていても共通することは、外国の学習者と共に自分たちも「学ぶこと」だと思いますが、同時に活動を通じて「新たな視点を得るチャンス」や「自分を広げるチャンス」なども期待しているのではないでしょうか。

そのためには、一人一人が外国者の為の日本語学習支援能力のレベルアップに努める必要があると思います。毎年開催される市主催のステップアップ講座に参加したり、県国際交流・協力ネットワーク会議などに参加し、他の地域のボランティアの方々との話し合いを通して見聞を広めるのも良いと考えています。

２．学習者が教室に望むこと

現在、日本語能力によるクラス分けをしていますが、学習者は、大学・大学院留学生、大学教員、ALT、会社の社員・研修生、主婦など、実に様々です。教室入会時の「日本語の何を勉強したいか」との質問に対し、最も多い希望は会話（日常会話、ビジネス会話、大学での会話など）ですが、次のような項目もあります。

漢字の習得、書く・読む・聴く力をつけること、敬語、文法、日本語能力試験に合格すること、日本の習慣、日本の文化、日本人との交流など学習者のニーズに応えるためには多くの課題があると思いますが、これらのニーズに応えるべきかどうか、少しでも可能にするような学習がどうしたら出来るかなど、これから皆様と考えていきたいと思います。

★スピーチ大会

アルル・サバリトウさんが、ひたち国際まつりの意見発表会、茨城県スピーチ大会に出て、ひたち国際まつりの意見発表会で“ひたち国際まつり実行委員長賞”を、茨城県スピーチ大会で特別賞をいただきました。

あしあと

・食と会話を
　楽しむ会(女性センター他)　9/11, 11/4, 1/30
・生け花クラブ（教育プラザ）　８回(9 月から)
・ 茨城大学地域団体
　交流懇談会（茨大工学部）　2/22

お知らせと今後の予定

・フレンドリーあんず総会　5/15
　（女性センター）
・食と会話を
　楽しむ会　隔月
・生け花クラブ　週１回

編集後記：東日本大震災のため、発行が遅くなりました。外国の方々の災害時の記事を掲載することにより、今後の活動の一助となるのではないかと思います。